神話と民話

8AWK1145 阿部未空

2011-5-17

今回・・・

❖ 「神話」と「民話」って、全然違うものなのに、たまに神話探していると民話の後ろにちょこおおおっと入っているっていうのがどうも納得いかなくて・・・

❖ 神話にも人間が出てくる話もあるし、民話にも神様が出てくる話もあるから・・・だから何なんだと思うけども・・・

神話

❖ 「現実の生活とそれをとりまく世界の事物の起源や存在論的な意味を象徴的に説く説話。神をはじめとする超自然的存在や文化英雄による原初の創造的な出来事・行為によって展開され、社会の価値・規範とそれとの葛藤を主題とする。」 広辞苑第五版より

意味不明

多分→昔は科学とか文明が発達していなかったから、物事を理由づけるために「自分たちよりも優れた力を持った者」が何かしたんだろうね。よーし、さっとそれ「神様」っていうんじゃね？さっとこうこう、こういう風な神様がいて、これが生まれたんじゃね？
神様連だってポンポンと作れるわけじゃないから、さっと何かしらの物語があったんだよ。山あり、谷ありだったんだよ！

・・・と、勝手に解釈しました。

民話

❖ 「民衆の中から生まれ伝承されてきた説話。」 広辞苑第五版より

さすがに少ない・・・

❖ 「民衆の生活の中から生まれ、民衆によって口から口へと伝えられてきた説話。昔話・伝説など。民間説話。民譚(みんだん)。」 goo辞書より

❖ 民話は、内容や形式によって、大きく「昔話」「伝説」「世間話」に分けられる。Wikipediaより

昔話（ムカシ、ムカシコ、ムカシガタリ）
「むかし」という確かではない時や「あるところに」という不明な場所を用い、本当にあったかどうかは知らないけれどという心持ちで語り継がれる話。「てっぺんぐらりん」「どんどはれ」「とっぴんぱらりのぷう」などで終わることが多い。

伝説（イイツタエ、イワレ）
ある特定の人物や時、場所と深く結びつき、少しは信じてほしいという心持ちを含んで、説明的に語り継がれる話。弘法大師や源義経など歴史上著名な人物が伝説の主人公となることも多い。古代の人物にまつわるときはしばしば神話と区別しがたい。

世間話
自らが主人公としてキツネに化かされたという類の話。近隣の人や親族、親戚が主人公である場合もある。実話や体験談のかたちで口承される。

民話と神話の違い

❖ 神話→神様中心の話

❖ 民話→人間・生き物中心の話

・・・と個人的に思いました

知っていそう(？)な神話

・・・知らないよね、きっと

❖ 日本で一番最初にできた偉い神様イザナミ、イザナギは3人の子供（神）を作りました。（まあ他にも自分の分泌物から日本列島も作ってるらしいんですが・・・。最初に生まれたのは淡路島らしい）

❖ 姉弟は多分聞いたことあると思いますが、アマテラスとツクヨミとスサノオといいます。

❖ スサノオは手の付けられないような性格をしていて、ある日アマテラスは岩戸に引きこもります。アマテラスは太陽の神だったので、世界は暗闇に包まれてしまいます。日光不足です・・・。他の神様は頑張ってアマテラスを岩戸から引っ張り出そうとしますが、嫌がって出てきてくれません。何か鶏をいっぱい鳴かせたらしいけど、興味を持ってくれない、参った・・・と思っていると、神の１柱であるアマノウズメが桶を踏みながらおかしな踊りを踊り出しました。その踊りが面白すぎたから、周りの神々は大爆笑。「私引きこもってんのに、何？歌うわ踊るわ、みんな外で大爆笑してるとか！」と気になってちょっと顔を出したアマテラスを引っ張り出し、世界に日の光が戻りました。

❖ という話。ここでは、日の光＝アマテラスということになっている。

❖ 余談ですが、アマノウズメは芸能の神。オカメ、おたふくはアマノウズメという説も・・・

知っていそうな民話

❖ 「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。」・・・で始まる例のアレも、民話に括られるそう。

❖ 日本の民話（昔話）は動物がよく出てきますね。タヌキ、ウサギ、キツネがけっこう多い気がするのは気のせいでしょうか？

北欧の神話

❖ よく「北欧神話」と言われます。

❖ 話はもちろん沢山ありますが、大まかに区切ると天地創造・神話に登場する神々の話・オーディンが人間の世界を旅する話・世界が終わるきっかけになった話・ラグナロク（神々の黄昏）に分けられます。

❖ 話の中に何人かの人間、巨人、ドワーフなどは登場しますが、主人公はどれも神様の中の誰かです。

❖ 実は「好きだ」と言ってる割にあまり内容は知らないのですが、その中でも2つの話を紹介します。だいぶ省略します。

バルドルの死

❖ オーディンの7人くらいいる息子の中にヘルモドという青年がいます。

❖ 全てに愛されると約束された神バルドルが、盲目の神ホズの投げたヤドリギで死んだ時、オーディンの妻で彼らの母のフリッガは「この中で誰か、バルドルを冥界から連れ帰ってくれる人はいないの？」と言います。そこで息子の一人であるヘルモドが名乗り出て、9夜をかけて冥界に行き、地獄の女王であるヘルに「兄のヘルモドを返してください」と頼みます。彼女は「・・・じゃあ、世界中のあらゆるモノが彼の死に涙を流したら、良いよ」という条件を出します。ヘルモドは帰ってそれを伝えると、今度は世界中の色んなモノ（人から植物まで全て）に兄の死を伝え、みんな涙を流すのですが、女巨人のセックだけは「私的にはバルドルとかどうでも良いし」と言って泣きもしませんでした。彼女のせいでバルドルを冥界から連れ戻すのは不可能になったのです。

❖ このセックという女巨人は、実はホズにヤドリギを投げさせバルドルが死んだ原因を作ったロキが変身した姿だったんです。

ロキの捕縛

❖ バルドルを殺したことで、いつか真相がばれた時、神々は復讐に来るだろうと考えていたロキは、ある日網を作っていました。（何でだよ・・・）そこへ神々がやって来たので、ロキは隠れるために鮭に変身し、近くを流れていた川に飛び込みました。やって来た神々は作りかけの網を見つけ、それが"何を捕まえるための網"なのかを理解し網を完成させると、川に網を投げ込みました。で、鮭（ロキ）を捕まえるのですが、神々はロキを捕縛した後、彼の息子のヴァーリとナルヴィを追跡し、ヴァーリを狼に変えナルヴィを引き裂かせました。ナルヴィの死体から取り出した腸で岩にロキを縛り付け、次に持ってきた毒蛇の毒液がまっすぐロキの顔に落ちるように蛇を鍾乳石に繋ぎました。洞窟に取り残されたロキの顔に毒がかからないように、彼の妻のシギュンは器で毒を受け止めてます。器がいっぱいになると、彼女は一旦毒を外に捨てに行くんですけど、その間、ロキの顔に毒がかかって彼は悶え苦しみます。そうしながら、彼はラグナロクを待っているのです。

❖ 悶え苦しむと大地が揺れるらしいんですが、それが地震だと言われているようです。

北欧の民話

❖ 春休み中に借りて未だに返していない「スウェーデンの民話名作集I」から。

❖ 川崎先生ならもっとたくさん知ってると思いますが・・・面白いので興味が湧いた人は是非読んでみてください。

❖ だいぶ端折ります。

オーディンのクリスマスステーキ ODENS JULSTEK

❖ ある粉屋の主人は、お金は無いけど粉挽き水車と水車小屋を持っていた。普段、大した仕事は無かったが、ある日主人の元に小人が尋ねてきた。「別の所で挽いてもらった小麦の質が荒かったから、頼めませんか？ご主人様の大切な小麦なんです」それを聞いた主人は、親切に粉を挽いてやると「今は貧しいかもしれませんが、これから穀物がたくさん来ますよ」という捨て台詞を残して小人は去って行った。翌朝から、主人は色々なところから粉にするための穀物が届いて忙しくなり、数年後にはお金持ちになった。ある夕方、主人が水車小屋で仕事をしていると、女の小人がやって来た。数年前にやって来た小人の妹だという。彼女は「こびり付いた挽き粉を掃除させてくれ」と言った。何に使うのかと尋ねると、「オーディンの猟犬に与える」と小人は言い、主人はそれを承諾した。その夜、主人が外にいると、空から「粉を挽いてくれてありがとう」という大きな音が降ってきた。「粉と引き換えに、クリスマスのステーキにする獣を下さい」と主人は頼んだ。真夜中、水車小屋には美しい布で包まれたどんな獣のものなのかわからないくらい巨大な肉が届いていた。その肉を物知りな元・船長の老人にどう調理すればいいか尋ねると、彼は肉を美味しく調理し、主人とその奥さんに「近々、王女様の結婚式があるから、このステーキを王様に届けなさい」と教えてくれた。言うとおりに王様に献上すると、王様はステーキを気に入り、夫妻と船長は褒美やたくさんの権利をもらうことができた。

箱の中を見たね
HAR DU TITTAT I MIN ALK?

❖ 大変貧しい農夫がいた。貧しすぎて、とうとう1番上の娘を売りに出した。が、売りに行く途中、老婆に「何処へ行く」と尋ねられ「貧乏すぎて娘を売りに」と答えると「なら私が買うよ。娘を売るなんていけないことだ。娘の代わりに金の鍋を差げる。家へ帰ったら、私の指示通りのことをしろ」と老婆は言い、農夫はその通りにした。すると翌朝、家畜小屋には家畜がいて、その側も、蓄えものも食べるものも沢山あった。一方娘は老婆に親切にしてもらっていて、彼女も老婆のために尽くしていた。ある日老婆は娘を置いて家を留守にすると言った。「でも絶対、小箱の中は見てはいけないよ」しかし、娘は小箱を開けてしまった。老婆が帰って来ると「箱の中を見たか？」と尋ねた。3度聞いても娘は「いいえ」と答え、老婆は娘の口を封じて家から追い出した。追い出された娘は森で王様と出会い、王様は娘に惚れて城へ連れ帰り2人は結婚した。1年後、王妃は男の子を生んだ。しかし前になると赤ん坊は姿を消していて、王妃は血に染まった小指一本を加えて寝ていた。王様は最初は怒っていたが、同じことがその後2回続き、3人も子供を失った王様は怒り、王妃を処刑することにした。処刑場の壁上に王妃は連れ出されると、彼女は最7の叫び声をあげた。高い場所に彼女の3人の息子を抱いた老婆が立っていたのだ。「私の小箱を見たか？」老婆が尋ねると、王妃は「はい、見ました」と答えた。老婆は「子供を取り上げたのは私で、小箱を残していったから子供の小指は無くなっている。お前は沢山苦しんだ。神は、お前を許すべきだと思はないよ」と言い消えてしまった。子供を取戻し、王妃の口がきけるようになった王様は喜び、末永く幸せに暮らした。

今回のまとめ

❖ 神話
- どちらかというと物語色というか、普通の小説のように読める内容が多い。
- 世界の成り立ち・日常・世界の終わり　大体こんな感じで纏まっているものが多い気もする。

❖ 民話
- 良い人には幸せな未来があって、悪い人には報復があり、教訓のような話が多い。
- こどもに聞かせるためなんでしょうか？

参考資料

❖ 広辞苑第五版

❖ Wikipedia

❖ Goo辞書

❖ 北欧神話物語

❖ スウェーデン民話名作集I